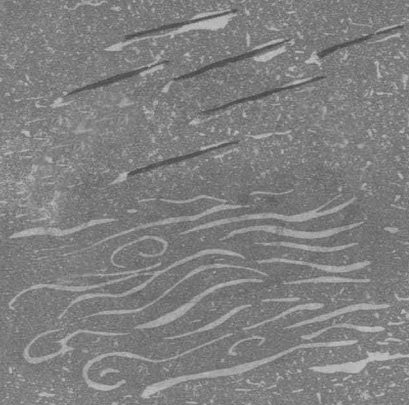
三國志

卷の六

三國志

六の巻

吉川英治著



講談社版

三國志卷の六

不許複製

昭和二十二年十一月五日　印刷
昭和二十二年十一月十日　發行

定價七十圓

著者　吉川英治

東京都文京區菅羽町三丁目十九番地
發行者　尾張眞之介

東京都文京區菅羽町三丁目十九番地
印刷者　益子恒義

東京都文京區菅羽町三丁目十九番地
印刷所　豐國印刷株式會社

東京都文京區菅羽町三丁目十九番地
發行所　株式會社　大日本雄辯會講談社
振替口座　東京三九三〇
電話　九段(33)代表　一三一番　一八六番

(黑柳製本)

配給元　日本出版配給株式會社　東京都千代田區神田淡路町二(九)

目次

新野の卷

風の便り……二
避客牌……三
關羽千里行……三

五關突破……四四
のら息子……六二
古城窟……七七
兄弟再會……九一
于吉仙人……一〇八
孫權立つ……一二六
霹靂車……一四七

溯卷く黄河……一六八
十面埋伏……一八八
泥[illegible]魚……二〇六
自壊闘争……二一〇
邯[illegible]鄲……二三二
野に眞人あり……二四二
遼西・遼東……二五六

食客……二六八
檀渓を跳ぶ……二八二
琴を弾く高士……二九五
吟嘯浪士……三一〇
軍師の鞭……三二

装幀　恩地孝四郎
挿畫　矢野知道人

新野の卷

風の便り

大戰は長びいた。

黄河沿岸の春も熟し、その後袁紹の河北軍は、地の利をあらためて、武陽（河北省 廣平附近）の要害へ據陣を移した。

曹操もひとまづ鄴洛して、將兵を慰安し、一日慶賀の宴をひらいた。

その折、彼は諸人の中で、

『延津の戰では、予がわざと兵糧隊を先陣につけて敵を釣る計略を用ひたが、あれを覺つてゐたのは荀攸だけだつた。しかし荀攸も口の輕いのはいけない』

と、思ひ出ばなしなど持出して大いに賑つてゐたが、そこへ汝南（河南省 汝南）から早馬が到來して一つの變を報じた。

汝南には前から劉辟、龔都といふ二匪賊がゐた。もと黄巾の殘黨である。

かねて曹洪を討伐に遣つてあつたが、匪軍の勢ひは猛烈で洪軍は大痛手をうけ、いまなほ、退却中といふ報告であつた。

『ぜひ有力な援軍を下し給はぬと、汝南地方は黄匪の狙獄にまかせ、後々大事にいたるかも知れません』

と、早打の使者はつけ加へた。

ちやうど、宴の最中、人々騒然と議に沸いたが、關羽が、

『願はくは、それがしをお遣りください』

と、申し出た。

曹操は、微ほゝえみながら、

『おゝ、羽將軍が行けば、たちどころに平定しようが、先頃から御邊の勳功は夥しいのに、まだ予は、君に恩賞も與へてない。――然るにまたすぐ戰野に出たいとは、どういふ御意志か』

と、すこし疑つて訊ねた。

關羽は、答へて云ふ。

『匹夫は玉殿に耐へずとか、生來少し無事でゐると、身に病が生じていけません。百姓は鍬と別れると弱くなるさうですが、此方にも無事安閑は、身の毒ですから』

曹操は、呵々と大笑しながら、膝をたゝいて、――壯なるかな、さらば參られよと、五萬の軍勢を與へ、于禁、樂進のふたりを副將として添へてやつた。

あとで、荀彧は、曹操に意見した。

『よほどお氣をつけにならんと、關羽は行つた儘、遂に歸つて來ない事かも知れません。始終容子を見てゐるに、まだ玄德を深く慕つてをるやうです』

曹操も、反省して、

『さうだ、こんど汝南から歸つて來たら、もう餘り用ひないことにしよう』

と、うなづいた。

汝南に迫つた關羽は、古刹の一院に本陣をおいて、あしたの戰に備へてゐたが、その夜、哨兵の小隊が、敵の間諜らしい怪しげな男を二名捕まへて來た。

關羽が前に引据ゑて、二名の覆面を脫らせてみると、そのひとりは、何ぞ計らん、共に玄德の麾下にゐた舊友の孫乾なので、

『やあ、どうしたわけだ』

と、びつくりして、自身彼の縛めを解き、左右の兵を退けてから、二人きりで舊情を溫め合つた。

關羽は何よりも先にたづねた。

『其許は、家兄玄德のお行方を知つてゐるだらう。いま何處にをられるか』

『されば、徐州離散の後、自分もこの汝南へ落ちのびて來て、諸所流浪してゐたが、ふとした緣から劉辟、龔都の二頭目と親しくなり、匪軍のなかに身を寄せてゐた……』

『や。では敵方か』

『ま、待ちたまへ。――ところがその後、河北の袁紹からだいぶ物資や金が匪軍へまはつた。曹操の側面を衝けといふ交換條件で――。そんなわけで折々河北の消息も聞えてくるが、先頃、或る確な筋から、御主君玄德が、袁紹を賴まれて、河北の陣中に居られるといふことを耳にした。それは確實らしいのだ。安んじ給へ。いづれにせよ、御健在は確實だからな』

二

故主玄德はいま、河南に無事でゐると聞いて、關羽は爛々たる眼に、思慕の情を燃やしながら、しばらく孫乾の顏を見まもつてゐたが、やがて大きな歎びを、ほつと息づいて、

『さうか。……あゝ有難い。だがまさかおれを歎ばすために、根もない噂を聞かすのではあるまいな』

『なんの、汝南へ來た袁紹の家臣から聞いたことだから、萬まちがひはない』
『天の御加護とやいはん』
關羽は、瞼をとぢて、何ものかへ、恩を謝してゐるふうだつた。
孫乾は、さらに聲をひそめて、
『汝南の匪軍と、袁紹とは、いま云つたやうなわけで、一脈の聯絡があるものだ。……だから明日の戰では、劉辟、龔都の二頭目も、みな僞つて逃げるから、そのつもりで手心よろしく攻め給へ』
『何で、彼等が、僞つて逃げるのか』
『匪軍の將ながら、劉辟も龔都もかねて心のうちで、ふかく其許を慕つてをつた。で、此たび羽將軍が攻め下つて來ると聞くと、むしろ歡びをなしたほどなのだ。併し一面、袁紹と結んでゐる關係もあるから、戰はぬわけにもゆかぬ』
『わかつた。彼等がその心ならば、手心をしよう。それがしは平定の任を果せばそれでよい』
『そして、一度、都へ歸られた上、二夫人を守護してふたゝび汝南へ下つて參られい』
『おゝ、一日も急がう。……すでに御主君の居どころが分つたからには、一刻半日もじつとしてゐられない心地はするが、その御居所が、袁紹の軍中だけに、もしそれがし不意に行つたら、ど

んな變を生じようも測り難い。――なにせい先に顔良、文醜などの首をみなこの關羽が手にかけてをるからな』

『では、かうしませう。……この孫乾が、先に河北へ行つて、豫じめ袁紹とその周圍の空氣を探つておきます』

『む、む。それなら萬全だ。身に變事のかゝることは怖れぬが、彼に身を寄せ給うてゐる御主君が心がかり……。頼むぞ、孫乾』

『お案じあるな、きつと、そこを確めて、あなたが二夫人を守護して來るのを、半途まで出て待つてゐませう』

『おゝ、一刻もはやく、主君の御無事なおすがたを見たいものだ。ひと目、その思ひを果せばそれだけでも、關羽は滿足、いつ死んでもよい』

『なんの、これからではありませんか、羽將軍にも似あはしくない』

『いや、氣持のことだ。それほどまで待ち遠いといつた迄のこと』

陣中すでに更けてゐる。

關羽は、裏門からそつと、孫乾ともう一名の間諜を送り出した。

『怪しげな密談を？　……』

と、背から注意してゐた副將の于禁、樂進のふたりは物陰からそれを見てゐた。しかし、關羽を怖れてそこでは何の干渉もなし得なかつた。

あくる日、匪軍との戰は、豫定どほりの戰となつた。

賊將の劉辟、龔都のふたりは、颯爽と陣頭へあらはれたが、きたすぐ頗る大仰に關羽に追はれて退却しだした。首を取る氣もないが逃げろを追つて、關羽も物々しくうしろへ迫つた。

すると龔都がふり向いて、

『忠誠の鐵心、われら土匪にすら通ず、いかで天の感應なからん。——君よ、他日來給へ。われかならず汝南の城をお讓りせん』

と、云つた。

關羽は苦もなく州郡を收めて、やがて軍をひいて都へ還つた。

兵馬の損傷は當然すくない。

しかも、功は大きかつた。曹操の歡待はいふまでもない。于禁、樂進はひそかに曹操に訴へる機を狙つてゐたが、曹操の關羽にたいする信頼と敬愛の頂點なのを見てはへたに横から告げ口も出せなかつた。

三

祝盃また大杯を辭せず、かさねて、やゝ陶然となつた關羽は、やがて、その巨軀をゆら〳〵運んで退出して來た。

大酔はしてゐたが、歸るとすぐ、彼は、二夫人の内院へ伺候して、

『たゞ今、汝南より凱旋いたしてござる。留守中なんのお恙もなくいらせられましたか』

と、久しぶり拜顏して、四方山ばなしなどし初めた。

すると糜夫人は、

『將軍、妾の待ち佗びてゐたのは、そのやうな世間ばなしではありません。戰ひの途次、なんぞわが夫玄德の便りでも聞かなんだか。お行方を知る手懸りでも耳にしなかつたか……』

と、もう涙ぐんで訊ねた。

關羽は、大々した腹中から、大きな酒氣を吐いて、憮然と、

『その儀については、まだ手懸りもありませぬ。さりながら、この關羽がついてをります故、餘りにお心を苦しめたまふな。何事も、關羽におまかせあつて、時節をお待ち遊ばすやうに』

――と。糜夫人も、甘夫人も、珠簾の裡に伏し聽んで、聲を放つて泣き悲しんだ。

そして恨めしげに、關羽へ云ふには、

『さだめし、わが夫は、もうどこかでお討死を遂げてゐるのでせう。それと話しては、妾たちが、嘆き悲しむであらうと將軍の胸だけに包んでゐるにちがひない。……さうです、さうに違ひない。……あゝどうしたらよいであらう』

かうも思ひ、あゝも思ひ、女性の感傷は、纏綿と涙と戯れてゐるやうだつた。甘夫人も、共に慟哭しながら、こよひの關羽の酒氣をひがんで云つた。

『羽將軍も、むかしと違つて、いまは曹操の寵遇も厚く、恩にほだされて、妾たちが足手纏ひになつて來たのでございませう。……それならそれと云つてください。いつそのこと、將軍の劍で……妾たちの儚い生命をひと思ひに』

『何を仰せられますか』

醉も醒めて、關羽は胸を正した。そして改まつて二夫人へかう諭した。

『それがしの苦衷も少しはお酌みとりくだされい。曹操の恩に甘えるくらゐなら何でこんな忍苦をしてをりませう。皇叔のお行方についても、曙光が見えかけてをりますが、もし貴方樣がたにお告げして、それがふと内走の下女から外にでも洩れては、これまでの苦心も水泡に歸するやも知れずと、實は深く秘してゐる次第でございまする』